



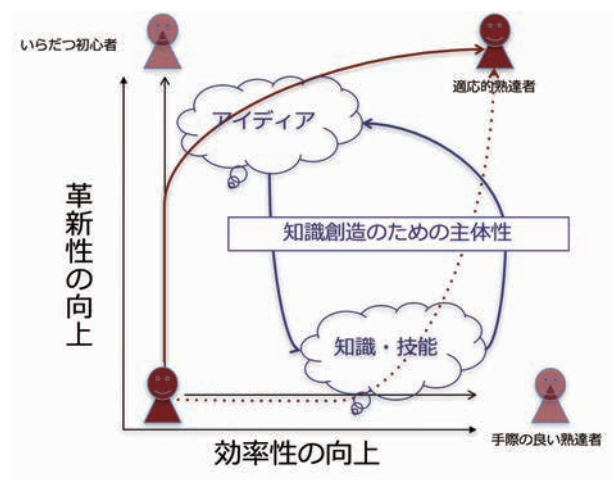
“人間の知性を探究し，デザインする”

教授 大島 純 (学習科学)

1963年7月生まれ、1995年トロント大学大学院博士課程修了 (Ph.D.)、1996年静岡大学助教授、2006年4月情報学部教授、2015年4月総合科学技術研究科教授
2013年より第2期卓越研究者、2016年より第3期研究フェロー

研究概要

「学校 (大学を含めて) で習うことは役に立たん」と嘆く方々も多いのは承知しております。しかし、これは学校での学習内容そのものが悪い訳ではありません。人間、どんな学習でも人生の何かの役には立つものだと考えています。では、なぜ、学校の勉強は役に立たないなどと言われるのでしょうか？私が研究している学習科学という学問領域では、この疑問に対して大きく二つの答えを持っています。まず、内容を「役に立てるようには」教えられていないということがあるかもしれません。習ったことを使えば、必ず役に立つような場面でも、習い方によっては、人はそれを利用しません。次に、人間の知性は必ずしも個人の能力としてだけでは把握できません。Team workが重視される現代では、人とのコラボレーションがうまい人の能力が評価されます。私の研究プロジェクトでは、こうした問題を解決するための学習環境のデザインを、情報テクノロジーやロボットを利用して設計しています。



メッセージ

21世紀型スキルの習得ということが、今後の教育現場では重視されるでしょう。OECDのPISAの国際比較テストにも、こうした観点が導入されていきます。日本人が、社会人としての国際競争力を持つためには、専門的な知識を学習するだけでなく、異なる専門家とのコラボレーションをうまく行える人物にならなければなりません。技術者だろうが、弁護士だろうが、あるいは医者、教師、その他の専門職において、他の領域の専門家からの指摘を踏まえつつ、自分の専門性をより高めていくことができる人を反省的実践家 (Reflective Practitioner) と呼びますが、まさにこうした能力がすべての人に必要となっています。このような能力を高める学習環境をデザインする研究に携わることで、設計する者は必ずと自分の力をつけていくことができます。興味を持った人は是非一緒に学習環境をデザインしましょう！

【主な研究業績】

外部資金獲得状況：

科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「Tabletを用いた革新的な協調学習の開発」(2014-2016)、科学研究費補助金基盤研究 (A)「アクティブラーニングの形成的評価ツールの開発と検証」(2016-2019)。

国内外の学会誌編集等：

「ijCSCL」編集 (2012-)、「The Journal of the Learning Sciences」編集 (2007-)。

著書・論文：

- 1) Oshima, J. et al. (2012). Knowledge Building Discourse Explorer: A social network analysis application for knowledge building discourse. *Educational Technology Research & Development*, 60, 903-921
- 2) Oshima, J. et al. (2015). A Multivocality Approach to Epistemic Agency in Collaborative Learning. In Lindwall, O., Häkkinen, P., Koschman, T. Tchounikine, P. & Ludvigsen, S. (Eds.), *Exploring the Material Conditions of Learning: The Computer Supported Collaborative Learning (CSCL) Conference 2015, Volume 1* (pp. 62-69). Gothenburg, Sweden: The International Society of the Learning Sciences.